

平成29年度第7回きのくにコミュニティスクールの推進に係る研修会（東牟婁会場）

- 1 日時・会場 平成30年2月23日（金） 13:30～16:30 那智勝浦町体育文化会館
- 2 参加者 市町村教育委員会きのくにコミュニティスクール担当者、学校教育関係者、県立学校関係教職員、学校運営協議会委員、共育コーディネーター等 合計 40名
- 3 内容

◆講演 「“志をはたしに”ふるさとに帰る人財の育成」
～地域総がかりで子どもの成長にかかわる大方高校の取組～
文部科学省 CSマイスター
高知県黒潮町教育委員会教育次長 畦地 和也 氏

- 今日の話のテーマ「大事なのは考え方」
- コミュニティ・スクール導入の背景
 - ・大方高校学校運営協議会発足まで
 - Before → 「学校も地域を必要としない」「地域も学校を必要としない」から出発
 - 高校には期待していない、高校を必要としてない、存続運動も起きない
 - ↓ 今の学びのシステムに問題・改革のチャンス
 - After → 地域に120%開かれた学校、学校も地域も互いに必要としている
- 自立創造型地域課題解決学習への取組（H18～ 一部抜粋）
 - H26
高知F.Dの公式戦を盛り上げよう！／デニムを使ったオリジナル商品を考えよう！『海辺の日曜日』に”学生ブース”を定期的に出店しよう！／黒潮町観光PRビデオを作成してください 等
 - H27
黒潮町観光PRビデオの作成／江戸時代の「かみ」を現代に蘇らせよう！！／デニムを使ったオリジナル商品を考えよう！／オブジェのシリーズを増やそう！／黒潮町の新しい観光資源を見つけて地域の活性化につなげよう！ 等
- 「地域人」としての高校生の育成を目指して
 - ・地域と協働して子供たちを育てる県立学校の姿
 - ・高校生のアイデアを元にした商品開発
 - 次期高校再編計画で「大方高校」は残っているか…
- 公立高校存続のための地域の動き（教育の地域化）
 - ・高校教育に地域が欠かせない時代
 - ・地域力維持に高校の存在が欠かせない時代
 - ↓
学校と地域の双方で連携・協働推進のための組織的、継続的な仕組みの構築が必要
- コミュニティ・スクールの運営
 - ・学校を核とした地域力強化＝コミュニティ・スクール/学校支援地域本部
 - 地域への愛着
 - 地域課題を解決していく力「まち・ひと・しごと創生基本方針」
 - ・地域教育コーディネーター（教育魅力化特命官）の配置
- 黒潮町の防災教育
 - ・黒潮町津波防災教育プログラム
 - ・繰り返しと継続、あきらめない訓練、あきらめない町民、あきらめない取組
- 「世界津波の日」高校生サミットin黒潮
 - ・2016年11月に第1回「世界津波の日」高校生サミットを黒潮町で開催
 - ・海外の人とどうやってコミュニケーションをとるか苦労
 - ・考え方をしっかり持って、防災学習を継承していく必要がある



○黒潮町の目指す児童生徒像（将来の人財）

- ・ふるさとを愛し、ふるさとに誇りを持ち、ふるさとの課題を見つけ、提案、解決、人の役に立つ生き方ができ、名前呼び合える人間関係を構築できる、コミュニティの一員としての自覚を持った児童生徒
- ・地域教育＋地域ビジネス＝地方創生→子供の成長に地域全体が積極的に関わる
◆全庁（町）体制 ◆外部人材の活用
- ・「ふるさと・キャリア教育」→入り口は小学校、使えるリソースは地域資源

○考え方が大事

- ・何のため→学校のため？校長のため？子供のため？ふるさとのため？
自分のため？10年後、20年後の地域の姿を想像する。
- ・教育の資源には限りがない。資源の奪い合いもない。（外部不経済がない。）
やればやるほど幸せな人が増える。

今後の展望

- 地域作りを地域の人と一緒にやってきたが、自立創造型地域課題解決学習は高校生にとって時間がなく、それを指導する教師も少ないため限界がある。それを解決するために、平成30年度から「ふるさと・キャリア教育」プロデューサーとして、小・中・高と関わってもら外部人材を入れてようにした。また、地域連携にはCSは必要であり、将来、社会の構成員として子供を育てる。地域と連携してその先に何があるのか、何を求めているのか各学校で目標を描き、それを共有して実現に向かうことが大切。

◆実践発表 「地域とともにあるきのくにコミュニティスクールの取組」

古座川町教育委員会 指導主事 山本 浩昭 氏

○古座川町の「ふるさと教育」

- ・地域教材を生かした自然体験学習
- ・地域の方々をゲストティーチャーとして招く
- ・人権学習や勤労体験

○地域の方々や施設との連携や交流

- ・地域の方々との運動会
- ・地産地消の食育、ジビエ給食
- ・保育所との交流会（小学校）や勤労体験（中学校）等



○古座川町子ども教育15年プラン

- ・保、小、中の連携・接続（平成28年度から施行）
- ・コミュニティ・スクールにつなげていく

○CS導入に向けて1（平成29年度）

- ・6月校長会にて協議
- ①各学校の事業計画の作成（古座中学校、高池小学校）
- ②各学校で8月頃に第1回学校運営協議会を開催
- ※推進委員の選定に苦慮（現在、推進委員不在）

○三つの柱の活用と準備

- ・校長が作成する学校運営の基本方針を承認すること
- 【活用】各学校がスクールプランを作成し、運営協議会委員に示す
- 【準備】教育計画や学力向上推進プランをベースにしたスクールプランの作成
- ・学校運営について、教育委員会または校長に意見を述べることもできること
- 【活用】学校運営協議会にて協議
- ・教職員の任用に関して教育委員会規則について、教育委員会に意見を述べることもできること
- 【活用】学校運営協議会にて協議
- 【準備】古座川町学校運営協議会規則を作成、町教育委員会にて規約の承認

○CS導入に向けて2（平成29年度）

- ・6月19日教育委員会定例会にて古座川町学校運営協議会規則の提案
- ①規則について質疑応答、意見交換
- ・課題点について規則の見直し
- ①学校評議員制度を本年度末で廃止 ②規則、第5条の2について再確認

- ・学校運営協議会を町内全小中学校で立ち上げを決定
- ・規則の承認、規則の承認後、7月21日臨時校長会を開催
- ①学校運営協議会規則を確認 ②町内全小中学校で学校運営協議会の立ち上げを確認 ③第1回学校運営協議会を9月1日に合同で開催 ④各学校でスクールプランの作成
- ・第1回学校運営協議会開催準備
- ①学校運営協議会設置について文書作成 ②学校運営協議会委員の委嘱（8月10日） ③古座川町報酬及び費用弁償条例を別に制定

○これからのコミュニティ・スクール

【本年度の成果】

- ・町内全小中学校に学校運営協議会が設置されたこと
- ・各学校の取組内容について、協議会委員と定期的な協議の場を持てたこと
- ・協議会から問題提起されたことが、学校の抱える課題と一致していること
- ・協議会委員の方々が、学校を一緒によりよくしていこうと協力的であること
- ・子供たちと地域の方々の温かい触れ合いを学校だよりで紹介

【来年度への課題】

- ・各学校ごとで協議され、全体で共有できる体制作り
例：コミュニティ・スクール合同会議（年1回）、CS推進員の設置
- ・地域と学校が一体となった取組の充実
例：ふるさと教育や体験学習の改善と充実
- ・全教職員がともにある学校運営協議会への参加
例：管理職以外の先生方の学校運営協議会への参加
学校運営協議会の担当を校務分掌に位置づけ
- ・学校運営協議会から提案された課題への対応と解決
例：県教育委員会への協力依頼や働きかけ

◆グループワーク、質疑応答

「異校種と連携して取り組めることは？」

グループワークでの意見

- ・地域と結びついた学習を行い、スクールプランを立てて学習効果が期待できるものを考えていく。
- ・小、中、高で活動を共有できるものを連携しながら見つけ出す。
- ・コミュニティ・スクールに関しては地域にいる同窓生を活用したり、子供のことを知る大人に委員として活用することが大切である。
- ・コミュニティ・スクールに限らず「考え方」が大切だという話が大変参考になった。地域、学校をどうしていくのかという「ビジョン」を共有し、中味のある議論が大切だと感じた。また、この研修会で小・中・高の連携が改めて大切だと感じた。

会場からの質問

○黒潮町に津波が34mと発表されたことで、前向きな意見が聞けたがその反骨精神はどこから出てきたのか。

- ・反骨精神ということではなくて深刻に考えず、何とかなるという考え方が大切。

4 参加者の声（アンケートより）

（小・中学校教職員）

- ・学びの多い研修会で自分の視野が広がった。今後に関わし学校、生徒、地域に還元していきたい。

（県立学校職員）

- ・講演の中の「考え方」をしっかりと定めるところで大変感銘を受けた。「何のためにするのか」は、コミュニティ・スクールだけでなくあらゆる分野に必要だということに再認識した。
- ・なぜ、コミュニティ・スクールを立ち上げるのか、しっかりした軸を持ち、取り組むことが重要であると感じた。

（市町村教育委員会職員）

- ・地域、保護者、学校の共有に大切なものはやはり「子供」ということになるのではないか。結果として地域にとって家族にとって学校にとって、プラスになるようにしていきたい。今日の研修でその気持ちが高まった。